

※本作品はフィクションです。実在の人物・団体などとは一切関係がありません。

本作品中で行われている行為を現実で行うと不利益を被る可能性があります。

また、十八歳未満の購入・閲覧・所持を禁じます。十八歳未満の方に本作を販売・貸与・譲渡、およびその他の方法で閲覧させることも禁止します。

本作品を閲覧した結果、何らかの不利益を生じたとしても作者は一切の責任を負いかねます。

本作の全て、または一部を無断で販売・複製・複写・転載・アップロードすることを禁じます。

童貞寸止めサークル♪

「アタシたち、童貞クンを焦らしまくってオモチャにして、色仕掛けで貞操帯も嵌めちゃいました(笑)」

一 寸止め手コキ入会面談

私立春秋院大学は昨年まで女子大であったが、昨今の共学化の影響を受けて今春から共学校として再出発を果たした。都内のほどよい郊外に立地しており、大学の雰囲気もよく歴史もあることから、共学化一年目でありながら男子入学生も相当数いた。

さて、そんな春秋院大学に、二人の仲がいい女子大生がいた。

桃屋敷（ももやしき）実衣華（みいか）はいわゆる黒ギャルである。こんがりとした小麦色の肌に派手に染めた金髪、濃すぎるほどのメイクと、絵に描いたように要素を揃えた彼女は、これまで幾度となく男をとつかえひつかえしていた。

一方の美賀小蜜（よしが こみつ）は黒い髪をツインテールにして、ミニスカートの下に黒いストッキングを穿いている。小柄で可愛らしく人懐っこい性格で、これまで数多の男を落としてきた。

二人はこれまでの大学生活で随分と男性経験を積んでいた。そこで、新しい年度に入ると同時に、心機一転新たな刺激が欲しいと思うようになったのだ。折も折、二人の所属している大学は今年から共学である。これまでの合コンなどでは見つけられなかった、奥手な目立たないタイプの男も捕まえられるのではないか。それを踏まえて、何かいい遊びはないか。

考えたのが童貞寸止めサークルの結成である。

大学に入ったばかりの世間知らずの童貞青年を己らの魅力で虜にしたあげく、射精を許さずにとこまでからかい続けられるか試すという、なんとも目をつけられる方の男性側にとっては、たまったものではない活動内容のサークルだった。

もちろん、そのような内容をそのままばらしてしまつては、やってくる男などいるはずがない。表向きは、『ワンチャン童貞卒業できるかもしれない感じの文化系サークル』と見えるよう、彼女たちは慎重に作戦を進めていた。

「春秋院大学文化研究会、と。ページはこれでいいかなあ」

「うっわー。サークル紹介している感じで、よく見ると何もわからない感じになつてんじゃない。小蜜、こーゆーの才能あるんじゃない？」

二人は小蜜が作ったサークルページを、スマホで見て確認していた。着物や、畳、花火：適当に拾ってきた素材写真を組み合わせ、最後に二人が『絶対に童貞を殺せる服』とネットで宣伝されていた服を着て、『メンバー募集中!』と書かれた紙を持っている写真をトップに置いて出来上がりである。

「さあさあ、花におびき寄せられておいで、哀れな童貞クン♡」

小蜜はにやにやしながら、作ったサークルページを公開するボタンを押した。

入学式や新入生ガイダンスなどと並行して、四月の大学はサークル同士の新入生奪い合いが苛烈に争われる。春秋院大学でもそれは例外ではない。

ここは大学のとある教室。実衣華と小蜜はここで、サークルのメールアドレスに連絡してくれた学生とサークル入会についての面談を行っていた。勿論、女学生はうまく断り、あるいは入会を諦めさせ、男性であつても童貞感がない者は同じ扱いをしていた。そうになると、なかなかいい獲物が現れない。

「今日もだめかなー」

「そおだねー、連絡くれたのは、あと一人いるけど…」

などと言いながら、最後の一人を待っていた。

すると、扉がノックされる。

「あ、あの…すみません…」

「はい、どおぞー」

二人が入室を促すと、おどおどした感じの男子学生が入ってきた。二人の童貞リーダーがピン、と反応する。どことなく自信なさげで、奥手そうな青年。顔は別に悪くはなさそうだが、無造作に伸ばした髪が目元を隠してしまっており、身だしなみに気を遣っている風もない。これは当たりではないだろうか、と思いつつ、対応する。

小柄な体格のわりに胸は大きいものを持っている小蜜は、胸元に大きな切込みの入った服を着ていた。ここぞとばかりに胸を寄せながら、

「そおだよお、キミが、麝香坂（じゃこうざか）夢世斗（むせと）クンかな？」
と可愛らしい声で尋ねる。

青年は、

「あ、はい…」

などと言いながら顔を赤らめ、気まずそうに目を逸らした。それを見て、いよいよ二人は内心でテンションを上げた。

「それじゃあ、サークルのことについて、ちよつとお話しようか」
「ここに座ってね」

二人は、夢世斗を椅子に座らせると、その両隣に座った。このような状況に慣れていなさそうな青年は、それだけで顔を赤らめ、どきまぎしている。

しかし二人はそれに気づかないようなふりをして、両サイドから密着し、さらに夢世斗の反応を調べた。

「ねえねえ、このサークルのことは、どこで知ったの？」

「あ、はい、ホームページを見て…」

「そおなんだ、あれ、ウチらで作ったんだよ♡」

へそを大胆に出し、ショートパンツの実衣華はもはや通常の服装というよりはビキニスタイルの水着姿のようであったが、そんな彼女が横から迫る。

「ねえ♡夢世斗くんはホームページ見て、どんなことしたいって思ったのお？おねえさんに聞かせて♡」

「あっ、えっと、そのっ」

夢世斗はどぎまぎしてしまつて、ろくに質問にも答えられない。その初心な反応に、二人は彼が童貞だと確信する。同時に、彼女たちのターゲットが決まった瞬間でもあった。

「茶道でも習いたい？美術館に行く？それともお、もつと別のことかなあ♡」

様子見の時間は終わり、童貞を攻略するフェーズが始まった。実衣華は耳元で優しく囁きながら、ネイルのほどこされた爪の先を、夢世斗のズボンの下に潜らせていく。

「え、ちよつと…実衣華さん…?」

戸惑う夢世斗を無視し、実衣華の手はやがて彼のパンツの下にまで達すると、妖艶な動きで夢世斗の肉棒をしごく。その動きはオナニーしかしたことのない夢世斗には刺激の強すぎるものだった。

「あっ、あっ…」

声にならない喘ぎを上げる夢世斗を見て、二人は本人にばれないように目くばせし、クスと笑う。童貞丸出しのその反応が、面白くて仕方がないようだった。

夢世斗は股間の快樂に集中するのに必死で、そんな二人の様子に気づくこともできない。

「ねえ、どうしちゃったの？夢世斗くん♡もしかして、こんなこと期待していたんじゃないのお？」

実衣華と反対側からは、小蜜が迫ってきた。夢世斗の頬に優しく手を添えると、顔を自分の方に向かせる。小蜜の可愛い顔が、視界に広がり、慌てて目を逸らそうにもざっくり開いた胸元や、むっちりとしたストッキング越しの脚が、悩まし気に夢世斗を誘惑する。

「あ、でも、いきなりそんな…」

「ふふふ、大学生になったんだから、こんなことも珍しくないんだよ？」

実衣華がねちっこく手コキを続ける一方で、小蜜は目を合わせて甘い言葉を囁く。

「ねえ、あたしたちのサークルに入ってくれるよね？ほかのサークルなんかと掛け持ちちゃだめだよ？いっしょに楽しいこといっぱいしようね♡」

「ああ、はい、入会しますううう」

童貞青年はたやすく陥落した。あまりの簡単さに、二人は内心で少し拍子抜けてしまうほどだった。



「ああっ、せんぱいつ、もうう…」

「ふふっ、実衣華って呼んで♡」

「み、みいか、さん…」

入会面談でいきなり美人の先輩に手コキされ、夢世斗は混乱しながらも快感に溺れているようだった。実衣華はその反応を楽しみながら、指の動きを調整する。伸ばした爪で先をカリカリとひっかいたり、余った皮を指でつまんだりしながら、一方では裏筋を激しく扱く。徐々に夢世斗が限界に近付いているのがよくわかった。

「あ、もう、だめですう…」

手の中で脈打つ肉棒から、実衣華は限界を悟ると小蜜に目くばせした。それを受けて、小蜜が可愛らしく叫ぶ。

「ああっ、いけなくい！この部屋、五時までしか使えないんだっ！」

もちろん、今適当についた嘘である。それと同時に、実衣華はぴたりと手の動きを止めた。

「それじゃあ、残念だけどここまでだね♡」

「えっ、そんな…」

今まさにイキそうになりながら、寸止めされた夢世斗は当然、不満そうな顔をする。

「ふふふ、そんな顔しないの。サークルに入ってくれたら、またいくらでも機会があるか

ら♡」

実衣華は餌を与えておくことを忘れなかった。そして彼女らの目論見通り、夢世斗は悶々とした気持ちと、これから起こることへの期待感を持って、帰路につくことになったのだった。

二 初めてのコンパでサイズ計測

四月も終わり、新入生は次々と所属するサークルが確定していく。夢世斗もちろん、あのサークルへの入会を決めていた。唯一残念だったのは、あの入会面談以来、彼女たちと長い時間一緒にいることができていないということだった。先程も授業時間の合間に呼び止められたが、飲み会に参加できるかの確認をされただけだった。

「夢世斗君はもうお酒飲める？」

「あ、はい浪人してて誕生日早いので…」

「そう、それは楽しみだね♡」

そんな会話から数時間後、歓迎の飲み会をするという連絡が夢世斗に送られてきた。ようやく落ち着いて彼女たちと話せる。そしてあわよくば…と、夢世斗は胸の高鳴りを必死に抑え込んでいた。

なんとといっても大学生の飲み会といえ、そのあとあんなことやこんなことが起こると相場は決まっているのだ、夢世斗の中では。

この辺り、女性経験の少なさから、やや極端な期待を抱きがちな夢世斗であったが、入会面談のときにあのような痴女行為をされているので、彼を責めることはできないだろう。夢世斗は飲み会の日に大人の階段を上れることを、半ば確信しながら期待していた。

そしてその日が訪れる。

大学近くの居酒屋の個室には、夢世斗と先輩二人だけだった。前回と同じような格好の二人はとてもセクシーで、夢世斗は心臓がどきどき高なる。

「夢世斗くん♡迷わなかった？」

いきなり小蜜が抱き着いてくる。その過激なスキンシップに、夢世斗は頬が緩むのを抑えられなかった。

「こらこら、小蜜。夢世斗くん戸惑ってるでしょ。ほら、ここ座って♡」

そして夢世斗は二人の間に座らされる。

「それじゃあ、夢世斗クンの入会を祝ってー」

「「かんぱい！！」」

既に注文されていたグラスを合わせ、口につけ、